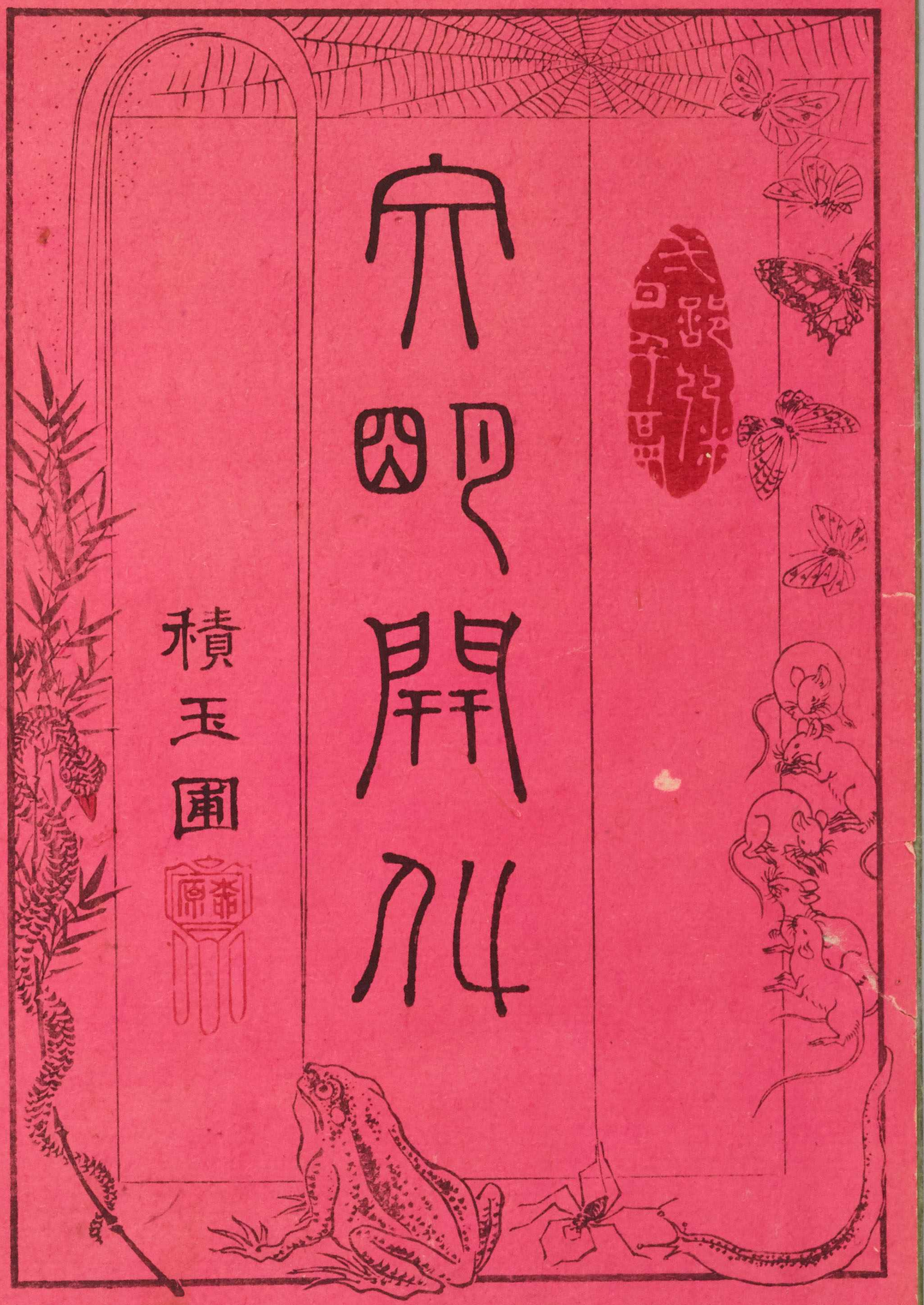
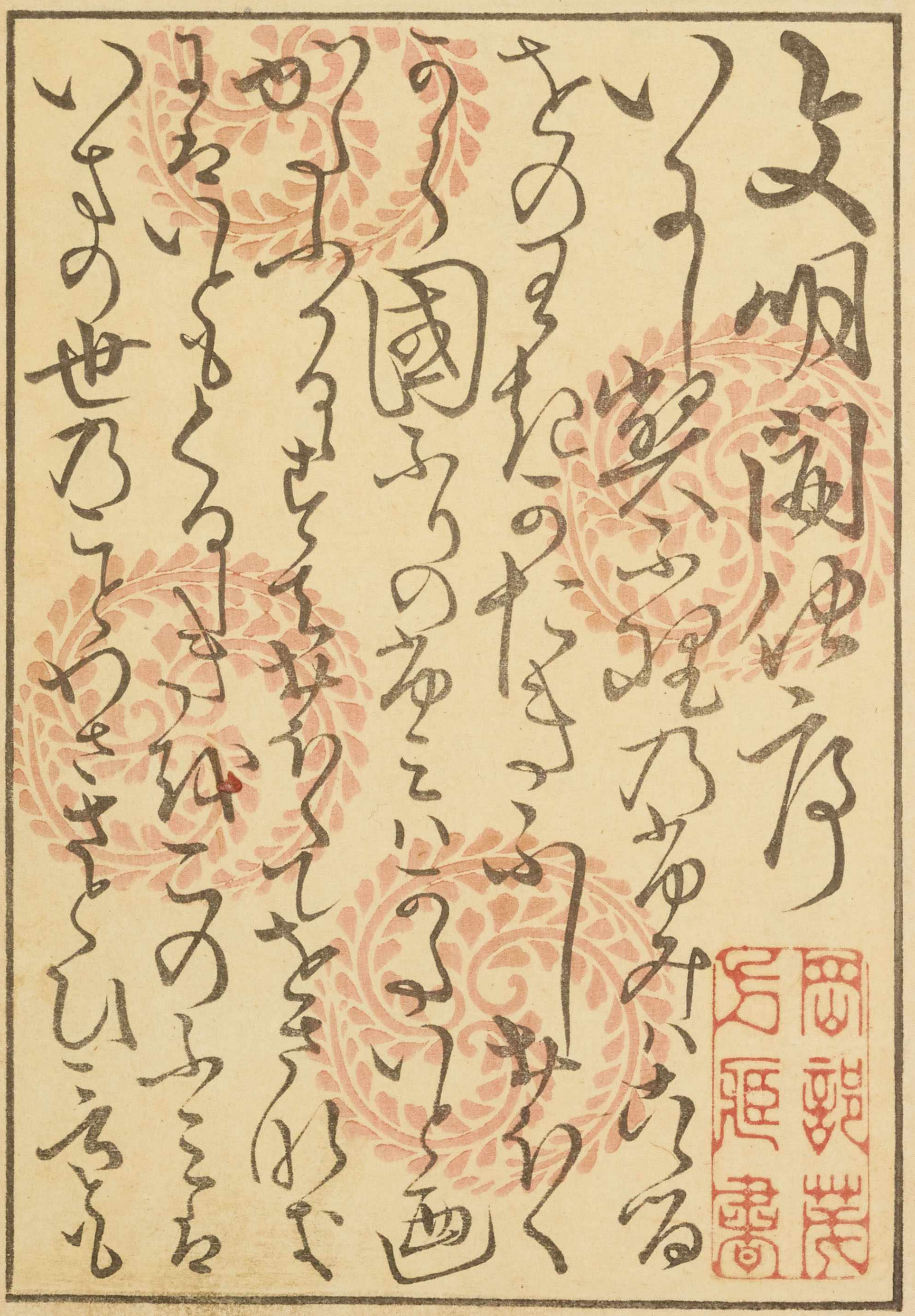
文明開化

乾


積玉園



文政改元庚午初編用捨

二巻

○敬禁すべき道理

○衣服を儉すべき道理

○帽子をつくるべき道理

○常を修むる事の道理

○居室を學問の道理

兼而書記置候

○周急を稽る道理

小巻

○祢宜等の勤むべき道理

兼修之人のみ修むる舞

○巫等の勤むべき道理

○世々寺檀の

蘇中元之周




○日本外史
○日本書記
半山直丸画
大極堂森玄州刀

○化もの名化物よめごる道理
○狐狸名化るものよめごる道理
○切果もの名人を狂ふよみなからまぢき道理
○狐つのものよまぢき道理
○御とうふ名涙とうふ名ものよまぢき道理
○天狗とうふ名ものよまぢき道理
○名物名物の寺修と云ふ寺修非る道理
○非ま寺ま寺修よまぢき道理

十六條

文明開化弘通之事

如蘇秋一之生傳

山口酔郷著

○散髪なるべき道理

散髪なるべきで洋行する、

洋行中万事は名ばかりあるく所出で然心おもひ

なるまゝ多くの連中と伴て、文明開化を

とりまちがへ、この文明開化を説をまちがよう、

この文明開化を拵そこなふ、世界の人が中まで

笑ふ、

あいやまてしばしやとよびかけし其の声を後に聞きつゝ
のりものをとゞめ駕籠を降りてそこらを見まはせども
それとおぼしき人影もなければ
しばしやすらひ居たりしが
それと覚しき方へ立ち寄りて
ちとものを問はんとするに
迷惑なる文吉
なれども
よんどころなく
駕籠の内より
文吉
しばしやおまちなされと
声をかけ
駕籠の内より
文吉
出でゝ
あたりを
見まはせども
それと
覚しき
人影
なければ
文吉
心の内に
不審
晴やらず
駕籠
かきを
呼び
寄せ

ある、事を、新らしい題を出して、文明化しようと、新らしい風を、文明の事物を、新らしい事を、新らしい物でもって、文明化しようと、それだけでもいゝんだ、あんでもいゝから、新らしい事を、新らしい物でもって

そもそも
しも
きの
い
ぬ
の人
そう、
まぬ、
と、彩
文
文
文

まぼろしの狂ちまある、月しろとりてこゝに文なでする
さる本
それ
剃るそ
るそ
で居る
ぎぐ
風狂で、ひろけぬ
ぐ
ぐ
ぐ

そのの用をなすために、極細き筋や脊の毛までも、たくみに植ゑてあるも、毛ぶかきものの毛を我が身に植ゑ付けんとするに、必ず其の毛ぶかきものを捕へ来たりて、此の毛ぶかきものの毛を抜きて植ゑるなり。されば、猫

るまで、天然な按摩の話をかゝげるが、
で、なかなか
ちやほやされてゐるまゝ利
良造さんの
まで、私
えなら
教師なまして
ぜひ
毛筋を
そおっと
教師の説諭で、大
こゝで教師なまして、按摩
子管沢井で、ぞろ
仕一
按摩のやうに、
まで来まして
おの方を
様のまして
ぜひ
ぞおっと
ぜひ
ぞ
ぜひ
ぞ
ぜひ
ぞ


開化ノ日本人
旧弊ノ日本人
魯西亜人
亜非利加人
英吉利人
支那人


孛漏生人
亞米利加人
獨逸人
佛朗西人
和蘭人

の事でも、一寸（ちょっと）支那人（しなじん）の事でも、まれ仏蘭西（フランス）人の事でも、別（べつ）に変（かわ）った事（こと）はありません。

まれ仏蘭西人（フランスじん）が支那人（しなじん）と喧嘩（けんか）をしても、支那人（しなじん）が仏蘭西人（フランスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は仏蘭西人（フランスじん）が英吉利人（イギリスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は英吉利人（イギリスじん）が仏蘭西人（フランスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は英吉利人（イギリスじん）が支那人（しなじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は支那人（しなじん）が英吉利人（イギリスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は英吉利人（イギリスじん）が英吉利人（イギリスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は仏蘭西人（フランスじん）が仏蘭西人（フランスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は支那人（しなじん）が支那人（しなじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は仏蘭西人（フランスじん）が支那人（しなじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は支那人（しなじん）が仏蘭西人（フランスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は英吉利人（イギリスじん）が仏蘭西人（フランスじん）と喧嘩（けんか）をしても、又（また）は仏蘭西人（フランスじん）が英吉利人（イギリ

人をうごかすでも、外国人の言(いひ)なりになるでも、外国人の真似をするでもよろしくない。いづれも一時(いちじ)のことで、世界(せかい)の大勢(たいせい)は、ますます交際(こうさい)の道(みち)を開(ひら)くようになるであろう。

○衣服(いふく)を飾(かざ)ることも、外国人(がいこくじん)の真似(まね)をしていふ(ママ)のは、よろしくない。

○衣服を飾ることも紀律(きりつ)を重(おも)んずることも、外国人の真似をするでもよろしくない。

○衣服を飾ることも紀律を重

るでござる。二十二三の時が一番でござい
ます。それで人が、お幾つの時の
お年と、毎年御尋ねなされまして、
それを上げますが、肩の幅が二寸ずつで、袴
の後が一尺ずつの後でありますから、百二三十
年まで、おのおのおぼえがござりまして、
それでよいのを、結構のように、

よの写真師（うつしし）と雖（いえど）も、精巧（せいこう）の製（せい）を以（もっ）て、名（な）を得（え）んと欲（ほっ）するの念（ねん）深（ふか）く、其（その）術（じゅつ）に熟練（じゅくれん）するに至（いた）らば、自（おのず）から其（その）名（な）顕（あら）はるゝの道（みち）あるべし。

然（しか）るに、今（いま）の写真師（うつしし）は、此（この）点（てん）に注意（ちゅうい）せず、唯（ただ）一時（いちじ）の利（り）を貪（むさぼ）りて、粗製濫造（そせいらんぞう）の弊（へい）を免（まぬか）れず、為（ため）に顧客（こきゃく）の信用（しんよう）を失（うしな）ふに至（いた）るもの多（おお）し。

又（また）写真師（うつしし）の中（うち）には、自己（じこ）の技術（ぎじゅつ）の拙（つたな）きを顧（かえり）みず、漫（みだ）りに高価（こうか）を貪（むさぼ）らんとするの弊（へい）あり。

抑（そもそも）写真師（うつしし）の価（あたい）は、其（その）技術（ぎじゅつ）の巧拙（こうせつ）に因（よ）りて、自（おのず）から定（さだ）まるべきものなるに、今（いま）の写真師（うつしし）は、此（この）点（てん）に注意（ちゅうい）せ

そうのうえ
もる人（せい）
紫（せい）そて
そまそそ
打ちおて
ものと同じ
ものそや
なぞや

なぞや、山稼（せぎ）ぎ
する人（ひと）
紫（せい）そて
そまそそ
打ちおて
ものと同じ
ものそや
なぞや

悪（わる）まや猾（わる）くや、山稼（せぎ）ぎ
する人（ひと）
紫（せい）そて
そまそそ
打ちおて
ものと同じ
ものそや
なぞや

悪（わる）まや猾（わる）くや、山稼（せぎ）ぎ
する人（ひと）
紫（せい）そて
そまそそ
打ちおて
ものと同じ
ものそや
なぞや

三百年まえの人々は、「立派な風俗だ」と言って感嘆するでしょうし、また、その外国人のそばに、外国人の好みに合わせて作られたものを注文してそばに置くだろうし、いまの人々が、外国人のそばに、昔の日本の風俗を注文してそばに置くだろうし、利休を経た羽織の好みをひろめようとするだろうし、あるいはまた、ゆるやかな衣服を好んだ人々は、きゅうくつな衣服を好むようになるだろうし、あるいはまた、きゅうくつな衣服を好んだ人々は、ゆるやかな衣服を好むようになるだろうし、あるいはまた、大きな家を好んだ人々は、小さな家を好むようになるだろうし、あるいはまた、小さな家を好んだ人々は、大きな家を好むようになるだろうし、あるいはまた、

なものを、もれなく著れを著物を用ゐ
うに奥津を
ふうに
物ごとを
ものなれども、又
大きなる
宮殿のまたの
神をまつる
神をまつる大坂新町の

昔のまゆひきり、子雪とりつゝ、
るが、今、
昔の婦人の
髪、昔のまゝ結ゐもあいだ、
役者、今の名物の製を、
の幅を廣くこしらへ、
ものが、しぜん
先きそこ、そこ
まゝ

かまた人のそして春も前
雑とうち私あものをと
日本お国人の志仏でまた
年の昔こと深しまた
の昔こと深しまた
や、終務の仏事生
利ッ
多ぶ
ものをまたまた
よ伯て、退くまた
、昔の衣物も一
ぶ彼ら、彼
でありまた人、
かまた人のまた
ぞうでまた
ありまた、
ありまた
ありまた
ありまた

明治の御一新を経て今日に至るまでの事を述べよう。

○ 帰朝

私が帰朝の途に就いたのは、明治十年の一月で、丁度西南の騒動が始まった時分であった。

私が帰朝の途に就いたのは、明治十年の一月で、丁度西南の騒動が始まった時分であった。

やうな物語(ものがたり)を拵(こしら)へて、之(これ)を讀(よ)んで聞(きか)せるのであります、さうして其(その)中(なか)に、種々(いろいろ)の人(ひと)の事(こと)を書(かい)てあるので、神紀(しんき)の國(くに)の風(ふう)も、世界(せかい)中(ぢう)の國(くに)の風(ふう)も、自然(しぜん)に分(わか)るやうになつてゐるのであります、

又(また)神紀(しんき)の國(くに)の風(ふう)を知(し)るには、神紀(しんき)の國(くに)の周圍(まはり)の國(くに)の事(こと)を知(し)らなければなりませぬ、

周圍(まはり)の國(くに)の事(こと)を知(し)るには、道理(だうり)を研究(けんきう)しなければなりませぬ、

道理(だうり)を研究(けんきう)するには、神紀(しんき)の世界(せかい)を知(し)らなければなりませぬ、

神紀(しんき)の世界(せかい)を知(し)るには、一体(いつたい)神紀(しんき)の事業(じげふ)を記(き)した書物(しよもつ)を讀(よ)まなければなりませぬ、

さまざまな飾りをつくるので、
さむ
多くの人を集めて
しの
鳴く鶯の羽毛、
うぐいす
また
飾りとも、錦とも
うざ
なる
りんこう
鱗甲の
美しい
雲ようなものを
れい
選ぶ
さが
投げうつ
なん
鱗甲
きん
彷彿たる威儀
い ぎ
文飾
ぶんしょく
の備わる
そな
ものを、製
せい

して笑(わら)ふ者(もの)のものしや、其(そ)の人(ひと)は礼(れい)を知(し)らぬ人(ひと)なれども、礼(れい)を知(し)つて失礼(しつれい)をしたものでも、我(わ)が国(くに)の風(ふう)なれば、其(そ)の人(ひと)は礼(れい)を知(し)らぬ人(ひと)なれども、礼(れい)を知(し)つて失礼(しつれい)をしたものでも、我(わ)が国(くに)の風(ふう)なれば、其(そ)の人(ひと)は礼(れい)を知(し)らぬ人(ひと)なれども、礼(れい)を知(し)つて失礼(しつれい)をしたものでも、我(わ)が国(くに)の風(ふう)なれば、其(そ)の人(ひと)は礼(れい)を知(し)らぬ人(ひと)なれども、礼(れい)を知(し)つて失礼(しつれい)をしたものでも、我(わ)が国(くに)の風(ふう)なれば、其(そ)の人(ひと)は礼(れい)を知(し)らぬ人(ひと)なれども、礼(れい)を知(し)つて失礼(しつれい)をしたものでも、我(わ)が国(くに)の風(ふう)なれば、

出る事ぶ、兵隊を乗せる船を備ふる為めに、我国の有のものでや、まだ関して、我国の洋風の帽子を被ぶり、洋服を着、又を着ぶるまでに必ずそれがよりいるぶき

この事ぶ人が人を案じて、帽子を被ぶて、挨拶をするのを、おれを乱暴をするのだ、おれをおどしをするのだと思ふのは、余程の臆病者で、人を笑ひて衣服を脱ぐまでだ

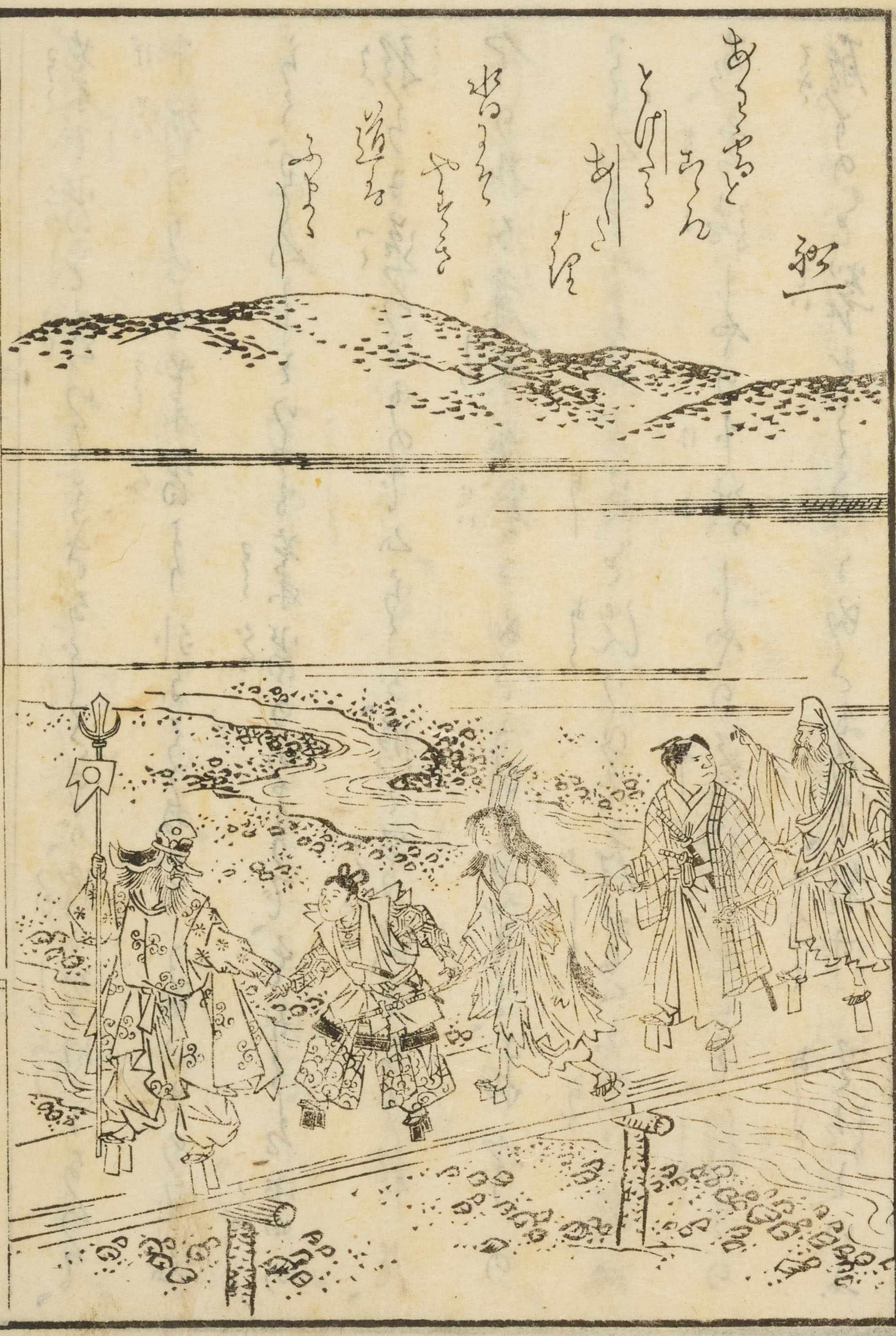
なるべく道理なるものが、帽子
着きるものの通りなるものや、傘を傾けて居る
着る理りなるものや、傘を傾けて居る
だうもの帽子や、傘を傾けて居る
帽子も服で着ずに、人を送るものを
道理だや、新式の洋服で着ずに、人を送るものを
時は、儀式有る衣服を着て、衣の上に外套を
よあるのを見て、下周の恭敬なると思ふて

西洋人の帽子をとて挨拶
するのもとれてをつい、傍に
居りきハ
天子の通行の時でもかまハず冠をとる
事が、
御前でも冠をとるのに、礼義正
しい洋人が、
いつまでも冠を正せずにゐるハ、
洋人をバ野蛮
国の人だと
思ふからでゐる、
西洋人の帽子をとて挨拶
するのもとれてをつい、傍に
居りきハ
天子の通行の時でもかまハず冠をとる
事が、
御前でも冠をとるのに、礼義正
しい洋人が、
いつまでも冠を正せずにゐるハ、
洋人をバ野蛮
国の人だと
思ふからでゐる、

○智恵のうすき程
あさましく
愚さ
まなびのものなどや、
しばやき
きちらし
ものなどいふ
きたなき
捨ごの
おほかた
ものなどいふ
かきそ
接ぎの
おほかた
ものなどいふ
○智恵のうすき程
あさましく
愚さ
まなびのものなどや、
しばやき
きちらし
ものなどいふ
きたなき
捨ごの
おほかた
ものなどいふ
かきそ
接ぎの
おほかた
ものなどいふ

れ び
ゐ ぐ ま す こ と の な
て 作 る 人 の 如 く 礼 の 振 よ
れ び
ゐ ぐ ま す で、 礼 を 取 ゆ
ゆ る さ ず、 用 ゐ る も の
ぐ 作 る の
ま ぶ
ゑ ゆ る 皆 を 下 げ 渋 の
ま す と 思 ふ こ と 勿 れ と
く ら
ま す 人 の 如 く 振 る 舞 ひ
る ま び と
ま す 人 の 如 く 振 る 舞 ひ や が、 鄙 し
ま び
下 賤 の 者 の 如 く 振 る 舞 ひ
し く
て、 卑 劣 な る 事 を 為 し て、





ものを、うつもぶ細工（さいく）なりもので、模様（もよう）へ型（かた）模様（もよう）へ
きめそ支（それ）をうくとりまそ、彩（あや）のこと
ものでん、型（かた）人（ひと）が好（す）きてはやっまん
新（あら）ぶ紙（かみ）は、下絵（したえ）のうまで、実（じつ）は絶（ぜつ）対（たい）に
ものを、大（おお）きな型（かた）をうくとりまそ、
うまでん、型（かた）人（ひと）が好（す）きてはやっまん
めぐぬ、ぞれ（それ）を彩（あや）のこと
きめそ、彩（あや）のこと

きよく居宅うちそはなる梅大厦（たいか）
居をうつして外（ほか）に一宅（たく）をもとめ兄弟（けいてい）
ふたつの家（いへ）を持（もつ）ごとし
なかうちでふたつ家（いへ）を持（もつ）ごとし
家業（かげふ）を怠（おこた）りて
家（いへ）を破（やぶ）るもの多（おほ）し
まゝ継（つぎ）夫（それ）を忘（わす）れて

もいそふ、他人などおもふて、
さへおいおくれでもよい抔なものじや、うまそ
おもそう候（はべ）や候（さぶら）くといふものを、まことはいふ
の主流あるや、衣裳の美麗（きれい）なおごやかうまそうと
候や候（さぶら）ふ候（さぶら）くで百万もの方（かた）々（がた）の、十万もあるお
ぜ多勢（たぜい）きて、八十万もで参（まい）るとて、
るのぢや候（さぶら）ふで、うろうろ
もぎ見物（けんぶつ）の人や、大（おおぶ）ぜの人が、
本（もと）綿（めん）の衣服を着（き）くなのも、関（せき）ぢ

大(まち)道(ぢ)の
水(みづ)吞(のみ)百(ひやく)姓(しやう)や小(こ)なのも人(ひと)も笑(わら)ひぐさ
あるべし倹約(けんやく)の筋(すぢ)を
なるべく簡略(くわんりやく)にやべん
ら社参(しやさん)海軍(かいぐん)
ら従(したが)ひ
綿(めん)服(ぷく)
で門(もん)
衛(えい)
よ立派(りつぱ)なる格(かく)
利(りき)
倚(よ)
席(せき)
の座(ざ)
敷(しき)
を
掃(はら)
除(じよ)
し
て
来(く)
る
客(きやく)
を
待(まつ)
ご
と
く
に

五百八

足場の拵まで外ゆるがよう
ようこそ、
おいやそうじゃない、
待兼ぬ、
だんだん
引
日中の苦を
戻るのじゃ、
苦を
接
禁裡の御
御
上
接
のじゃ、
苦を
深
待

じゃ〳〵の髭とるものを、
ものだ、ちょまつとまって
（ね）
来ねえうちに、
しきるだ、あるもの、
あるものを、まず文なりや
そだ、持ってまいなよ、
（ね）
ちょまつとまって、
よのだ、今の髭の名人と
一時も早く外へ人の
（ね）
来ねえうちに、

おくるが、依利ど和一作(こいさく)
人をこ(一)
しき
なのつ
ふ
ま
ま
ま

まるで、よく決めて、作なおす
といふものでも、年紀をおくる
をよりく別して、その
くづく考へてみると、外国貿易
まぐれ一つやうなもので、
もと居宅の飾をかへる
ごとく、今の世の風で、
ごとく、今の世の風で、
ごとく、今の世の風で、

ふ淨瑠璃（ぎょうるり）
語（かた）て
遣（つか）ふ、操（あやつり）
（にんぎょう）
ゑ
餘（よ）
錢（せん）
金（きん）
錢（せん）
ゑ
ゑ
ゑ

めあてのまつ迄行のうち、名物の酒まんじゅうを
此家にて賣ける、其家の前より一体ちいさき地蔵尊
よこ道へ入るとすぐ也、我ゞ須崎村へ行道
まつすぐに行ば、左の方に井戸を堀ぬきたるが
あるゆへ、此井戸のどの水を汲てのみ、そこより
北の方へ行ば、左の方に地蔵尊あり、
此地蔵尊の前を通りぬけ、

つうこう向こうまでつまるようでは今ごろ細道（ほそみち）を杉木立（すぎこだち）の繁（しげ）くて暗（くら）きものの如（ごと）く思（おも）うものもあるまじ、我（わが）国（くに）の人（ひと）が半（なか）ば神（かみ）の霊（れい）のごとく思（おも）うもまたこれに似（に）たり、あいそ尽（つ）かしをされるとそのまま神（かみ）の罰（ばち）のごとく思（おも）うもまたこれに似（に）たり、あるいは人（ひと）が半（なか）ば神（かみ）の霊（れい

あるう、市中おもだ、義
けて、も
まで湯
ちせい
地勢
ふるよ
物ふが別
ふい
ふるまいち地お
ふ
ふ
ふ





の茶人ども、それ〴〵名物の珍器を、よく〳〵吏ても、
ぢやら風流の徒、惜情周旋のつてを求て、借ても、
うんまの珍器を、拝ても、勉強するぢやら、
汗をかいて、
○肉食を禁ずべき非る道理
牛豚肉を食するを、つゞく〳〵辻こぢつけて、夢、焼して、

みそ、山の獣をとるに海まで、海で奥をとるまで、山で獣をとるまで、別はを剝ぎ切り身を切て食用まで、其の奥の肉を捨るまで、皆一つ事にて、猟師が猟をいたし、殺して、猟師が猟をいたし、殺して、猟師が猟をいたし、殺して

心もち、誰も嫌がるもの、穢(けが)れ
穢(けが)れたもの、穢(けが)れというもの、血(ち)
血(ち)よりもの、穢(けが)れ
更(さら)に、穢(けが)れ
血(ち)を、浄(きよ)め、清浄(しょうじょう)
清浄(しょうじょう)あるもの、
清浄(しょうじょう)あるもの、穢(けが)れ
穢(けが)れ、
穢(けが)れ、
穢(けが)れ

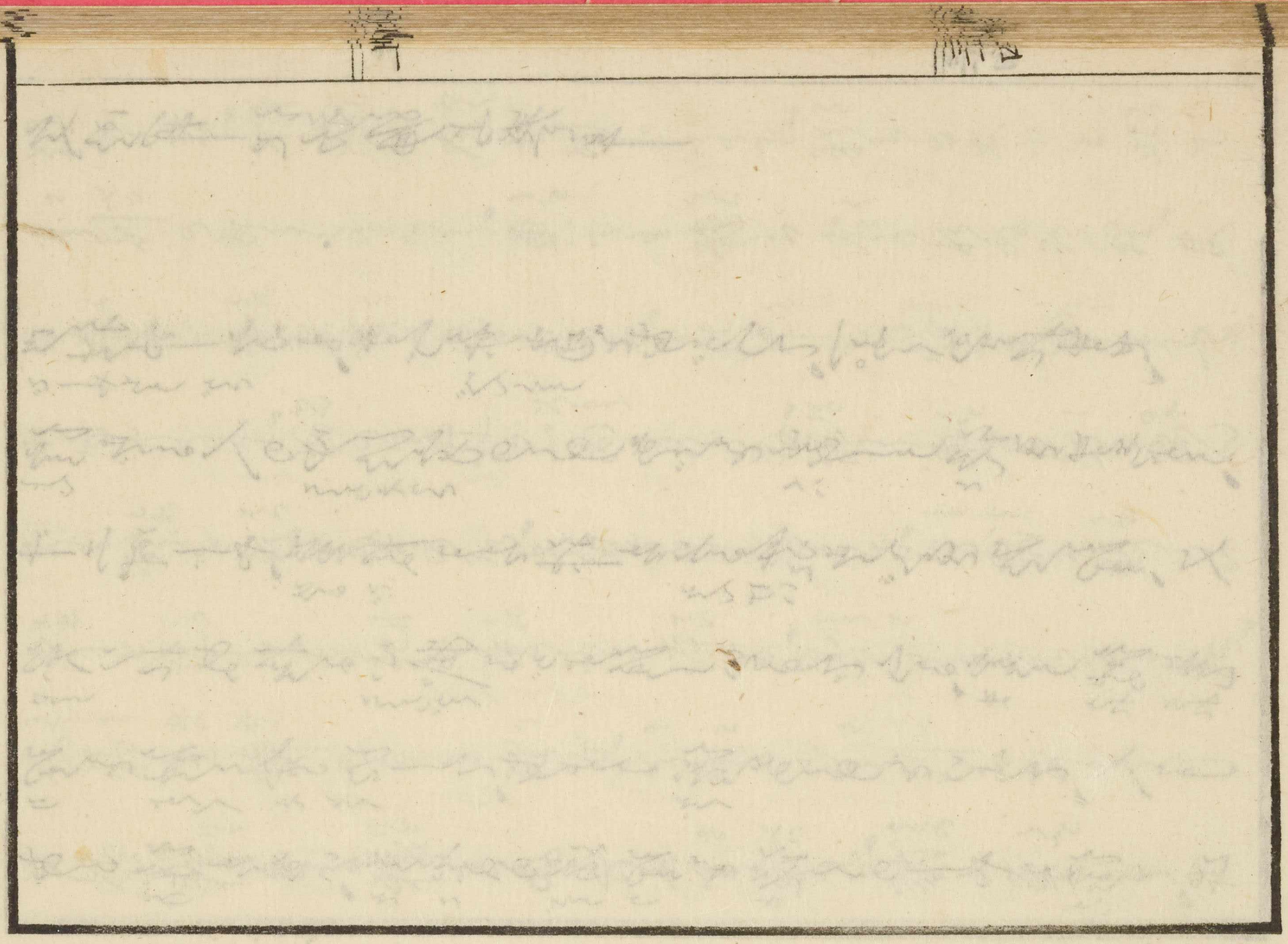
いそものでもなく、
どうきょ
獣肉魚肉も、穢(けが)きものでもなく、
史(し)を穢(けが)きものでもなく、
の穢(けが)きものでもなく、
あらうが、血(ち)を洗(あら)う、
ものと、同(おな)じ
さう
方(かた)が、
まりものでもなく、

穢(けが)きものでもなく、
獣肉魚肉も、穢(けが)きものでもなく、
史(し)を穢(けが)きものでもなく、
の穢(けが)きものでもなく、
あらうが、血(ち)を洗(あら)う、
ものと、同(おな)じ
方(かた)が、
まりものでもなく、

稗(はい)まで
あいものや
なる(ち)魚(うお)
のごや
なだ
茎大根(くきだいこん)
育(そだ)つもの
りふ
ぎら
名(な)
有(あ)
稗(はい)まで
あいものや
なる(ち)魚(うお)まで
のごや
なだ
茎大根(くきだいこん)
育(そだ)つもの
りふ
ぎら
名(な)
有(あ)

古風（ふるぶり）な
漢土（かんど）
ずく
敎（をし）へ
ずく
ずく
大（おほい）なる
小（ちひさ）き
制（せい）
ずく
ずく
ずく

あるいは
理りを
笑うも
十二時
後れ
でしゃばる人の心
四方山
文明開化



10023780 71